

博士（文学）学位請求論文審査報告要旨

論文提出者氏名	鈴木 綾子
論文題目	「心理学的ストレスプロセスと時間外労働、疾病休業との関連性の研究 行動計量的アプローチによるモデルの検討」
<p>審査要旨</p> <p>本論文は、心理学的ストレスプロセスと時間外労働、疾病休業との関連性の検討を行った研究である。</p> <p>本論文は、申請者が関わっている職場メンタルヘルス活動において、その理論的背景となる心理学的ストレスモデルと、疫学的な調査方法を中心とする職業性ストレスで扱われてきた指標との関連性についての検討を主軸とし、両者の統合的理解を提示している。加えて、特に心理学的ストレスモデルの要因の中でも、詳細な検討がなされていない心理的ストレス反応の性質を明らかにすることで、心理学的ストレスモデルを用いた臨床的介入への新たな示唆を与えている。本研究から得られた知見は、心理学的ストレスモデルに立脚するメンタルヘルス活動の有効性及び今後の方向性を示すものである。</p> <p>第1部では、本論文の依拠する理論とそれを取り巻く研究課題を明らかにした。</p> <p>第1部の研究史では、心理学的ストレスモデルの特徴と意義を示し、本モデルに立脚した臨床的活動を行うことの利点を指摘した。一方で、伝統的な職業性ストレス研究では疫学的調査を主な方法論としていることを示した上で、これらの先行研究から得られている知見について紹介している。疫学的調査を主な方法論とする職業性ストレス研究では、客観的に同定可能な指標が用いられていることが特徴のひとつであるのに対し、心理学的ストレスモデルは主として個人の内的プロセスに着目していることを述べている。その上で、前者のメリットは、客観的データとして第三者への説明が可能な点にあること、後者のメリットは、個人の内的プロセスへの臨床的介入によってストレス反応の低減が可能となる点にあることを示している。しかしながら、心理学的ストレスプロセスと、職業性ストレス研究で用いられる指標との関連性については明らかになっていないことを指摘し、これを問題提起の1点目としている。</p> <p>また、心理学的ストレスモデルによる活動の利点のひとつとして、心理的ストレス反応（感情反応）をアウトカムとしている点を述べているが、従来の心理学的ストレス研究の枠組みでは、心理的ストレス反応の詳細な検討がなされていないことを指摘し、問題提起の2点目としている。</p> <p>さらに、以上の2つの問題提起については性差を考慮すべきことを指摘した上で、具体的には以下の3つの研究を設定した。</p> <ol style="list-style-type: none">1. ストレス要因としての時間外労働及びストレッサーが、心理学的ストレスモデルにおけるアウトカムとしての心理的ストレス反応に及ぼす影響を明らかにすること。2. 心理的ストレス反応の下位尺度について、その性質を明らかにすること。3. 時間外労働、ストレッサー、心理的ストレス反応が疾病休業に及ぼす影響を明らかにすること。 <p>第2部では、上記3つの研究を行い、その結果を示している。ここでは、構造方程式モデルや項目反応モデル等、現在の心理統計分野で高い水準にあると考えられる数理モデルを適用し、解析を展開している。第3部では、これらの3つの研究を総合的に考察している。時間外労働という環境刺激が、疾病休業取得というアウトカムと関連するまでに、心理学的ストレスプロセスが介在することを明らかにし、心理学的ストレスモデルに立脚するメンタルヘルス活動の有効性を指摘している。さらに、心理的ストレス反応の詳細について示し、心理学的ストレス研究の実践と理論に対しての新しい知見を提供している。</p>	

氏名 鈴木綾子

申請者の関わるメンタルヘルス活動は、心理学的ストレスモデルに基づいているが、本研究により、疫学的調査で用いられるアウトカムに対しても、心理学的な臨床介入が有効性を発揮する可能性が示唆された。この関係性の検討は他の研究報告では認められず、本研究分野での知見として高く評価できる。今後は、疫学的調査で用いられる種々の指標についても検討が望まれるところである。

上記の関連性の検討に着目した端緒は、メンタルヘルス活動の実践から得られた視点及び先行研究の精査により得られた着想に基づいており、その理論構築は評価に値する。また、得られた知見について臨床心理学的な点から考察し、その意義を指摘しているだけでなく、本研究から得られる示唆について、メンタルヘルス活動を展開する視点からの考察がなされ、本分野についての広い見識を修得している。また、単にストレスプロセスと時間外労働、疾病休業の関連性の検討に依拠するのではなく、性差による差異等を含め、学術的課題を統合して包括的に研究を展開している。

本論文は 40000 人を超える調査データから構成され、調査対象となっている事業所数は 20 を超えている。本論文より導き出された結果の一般性は高いものと言える。

このように、本研究による心理学的ストレスモデルに立脚するメンタルヘルス活動への貢献は大きいものと評価できる。

以上の理由により、本論文は、博士（文学）の学位を授与するに十分値する水準であると認められる。

以上

公開審査会開催日	2009年12月21日		
審査委員資格	所属機関名称・資格	博士学位名称	氏名
主任審査委員	早稲田大学文学学術院教授	博士（文学）早稲田大学	小杉正太郎
審査委員	早稲田大学文学学術院教授	教育学博士（東京大学）	豊田秀樹
審査委員	聖徳大学人文学部准教授	博士（文学）早稲田大学	福川康之
審査委員			
審査委員			